

腫瘍外科医の生き方

— 華岡青洲に学ぶ —

和歌山県立医科大学 第2 外科

山上 裕機

▶ 華岡青洲を知っていますか？ 有吉佐和子の『華岡青洲の妻』の小説や演劇は知っていても、華岡青洲の人となりや医学的な業績となるとよく知らないのではないだろうか。

▶ 華岡青洲は1760（宝暦10）年10月23日、和歌山県那賀町平山で華岡直道の長男として生まれ、名を震（ふるう）、号は随賢、通称雲平、または青洲と称した（図1）。

西暦1804（文化元）年10月13日、世界で初めて『通仙散（つうせんさん）』を用いた全身麻酔による乳癌の摘出手術に成功した外科医であり、文字通り、華岡流外科の創始者である。

▶ 通仙散とは、青洲が20年近くの歳月をかけ、『曼陀羅華（まんだらげ）』の花を主成分として完成させた全身麻酔薬のことで、曼陀羅華は別名『朝鮮アサガオ』と呼ばれ、私たちの和歌山県立医科大学の学章にもなっている（図2）。

▶ 青洲の里である那賀町平山を紹介したい。

和歌山市から紀ノ川沿いに車で約40分の田園地帯に那賀町はある。紀ノ川は遙か高野連峰にその

源を発し、和歌山平野を横断して紀伊水道に流れ込む大河である。やはり、有吉佐和子の小説『紀ノ川』でご存じの方も多いのではなかろうか。電車ならJR和歌山駅から名手駅で降りる。あぜ道を北東へ徒歩20分で青洲の里である。みかん畑と豊かな田畑に囲まれた静寂な丘にあり、眼下には紀ノ川の流れが悠久の時を刻んでいる。紀ノ川の河川敷に下る丘の斜面には四季折々の花が咲き乱れている。

▶ 青洲の里には、診療所および医学校である『学塾 春林軒』の跡が記念館として残っており、当時の外科病棟や手術の様子が再現され見学ができる。

春林軒の門をくぐると、中庭になっており、診療所や入院病棟が中庭を囲むように並んでいる（図3）。当時の診察風景や手術の様子が再現されており、とくに手術器具や麻酔に用いた薬草に関する書籍などは興味深い。

青洲の父直道もオランダ外科を学んだ医師であったが、父の許しを得て1782（天明2）年、京都に遊学し、漢方医学者の吉益南涯（よしますなん



図1 華岡青洲（1760～1835）



図2 和歌山県立医科大学学章



図3 春林軒

がい)に古医方を、カスバル流外科医で有名であった大和見立(やまとけんりゅう)にオランダ外科学を学んで、1785(天明5)年和歌山に帰郷し、家業を継いだ。

▶帰郷後、毎日の診療に多忙をきわめる中、多くの動物実験を経た後、曼陀羅華配合の内服全身麻酔剤である通仙散を考案し、妻・加恵による人体実験で臨床薬理的検討を加えた。この経緯は有吉佐和子の小説『華岡青洲の妻』にくわしい。

その後、1804年10月13日、初の本剤使用による乳癌摘出手術に成功した。モートンがボストンのマサチューセッツ総合病院で行ったエーテル麻酔法が1844(天保14)年なので、青洲はちょうどその40年前に春林軒で全身麻酔に成功したことになる。

その後も他の部位の癌や結石などの手術を行ったが、やはり乳癌患者が多く、全国各地から患者が集まったという。

▶そして、この華岡流外科を学ぶためにほぼ全国から入門者があった。弟子第1号は中川修亭だが、

ほかに水戸の本間棗軒や備前の難波抱節らが有名である。青洲は春林軒で漢・蘭医方を折衷した外科を教授し、『内外合一・活物窮理』がモットーであった。この『内外合一・活物窮理』こそ、医学とくに腫瘍外科医にとって重大な意味を持つ。『内外合一』とは、文字通り、『医療を行う場合には内科と外科に分かれて診療することは悪いことではないが、内科でも外科でも互いに自分の専門外といって何も知らないようでは十分な治療を行うことは出来ない』という意味とされている。すなわち、外科医たるもの、内科学の知識と技術に精通すべしという教えであろう。私も外科学史の講義ではこのような解説をしているし、時代を超えて外科医のあり方を教えてくれる名言であろう。

▶細胞工学・遺伝子工学が発達した現在、腫瘍外科医にとって『内外合一』とはいかなる意味であろうか。癌の外的な表現形は肉眼的・顕微鏡的な病理組織学的な形態の理解のみならず、その内的な変化、すなわち遺伝子発現やシグナル伝達の異常を深く考えることで初めて理解できる。内なる



図4 和歌山県立医科大学内の碑

遺伝子変化・シグナル伝達の変化が外なる腫瘍の形態や転移・浸潤といった生物学的特性に合一する。腫瘍外科医はこの『内外合一』の事実を冷静に受け止め、流動的に変化する癌の特性を内から外から解析することが肝要といえる。

▶『活物窮理』とは、『患者の診察に際して人体(活物)というものを極め(窮理)、知り尽くした上での診療でなければならない』という意味である。まさに、基礎医学の重要性をわれわれに教えている。図4は和歌山県立医科大学に建てられた活物窮理の碑である。腫瘍外科医にとって基礎医学とは何であろうか。先程の細胞工学・遺伝子工学に他ならない。

▶さて、活物を窮理するにはどのような手法があるのか。和歌山県立医科大学の初代学長である古武弥四郎先生が卒業生に請われて表した書がある(図5)。謂く、『本も読まなければならぬ。考えてもみねばならぬ。ただし凡人は働かねばならぬ。働くとは天然に親しむことである。天然を見つめることである。かくして天然が見えるようになる』

と。古武学長は、われわれ凡人の医師・医学者は働かねばならないと教える。ついで、働くとは天然を見つめることと教える。天然とは臨床医学では患者、基礎医学では細胞・遺伝子であろう。腫瘍外科医にあつては、患者をよく観察し、細胞・遺伝子の変化を見つめよという教えである。かくして患者や細胞・遺伝子の変化が見えるようになると。華岡青洲の『活物窮理』につながる教えといえる。

▶乳癌の治療に関する臨床記録である『乳巖治験録』以外にはみずから著書を残さなかつた青洲であるが、『内外合一・活物窮理』という現代に通じる名言を残した功績は大きい。

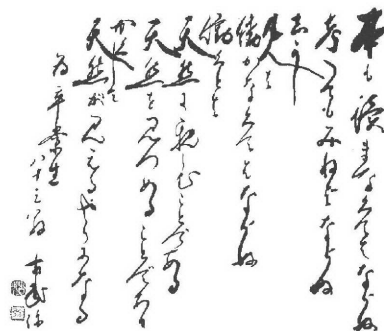


図5 古武弥四郎先生の書